
太陽の下で

明銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽の下で

【Nコード】

N3068H

【作者名】

明銀

【あらすじ】

真夏の陽炎が見せた幻、踏切がなくなぐ二つの世界。終わりを意識した少女が出会ったのは、大切な想い出だった。

『太陽の下で』

作：明銀

掲載：『いつかみたあの空のような』

それは、真夏の陽射しが見せた一瞬の幻。線路の向こう。陽炎が作り出した異界への扉。

たった三両しかない電車が、ごとごとといって駆け抜けた。黄色と黒の縞々模様。踏み切りのバーが持ち上がる。

そこに、ヤツがいた。

一面に広がる緑の海。風に波打つ見渡す限りの水田。その中心を切り取ってまっすぐに伸びるコンクリートの道。真昼の太陽の熱をたっぷり浴びて、ゆらゆらと陽炎を立ち上らせる。

ヤツは、まるでそこにいるのが当たり前のような顔をしてたっていた。目と目があつて、にいつて笑いかけられた。逆光に顔がかくれて、よく見えなかったけれどその笑顔は、まるで昔と変わっていない。思わず叫んだ。

「たくま！ あんた、なんで」

線路の向こう、たくまは困った顔をして笑っている。

「オレも、わかんね。気づいたらここにいたんだ」

声変わり前のちよつとかすれたその声も、あの日とまるで変わらなくて、胸が切なくなる。

「ずっと、ずっとずっと待ってたのに。置いてかないでって言った

のこ」

思いつきり睨み付けて叫んだはずなのに、あとからあとから涙があふれて止まらない。だって、大好きだったから。タクマはわたしの世界の中心だったから。あの日まで。

「なあ、泣くなよ。オレ、お前に会いに来たんだ。これが最後かもしれないんだ。だからさ、お願いだから笑っていてくれよ」

困ったように彼がいう。だけど、だけどそんなの、無理にきまってる。

「仕方がねえなあ。あんまり時間ないってのに」

うつむいて、嗚咽を漏らすわたしに、タクマが苦笑いをした。

「ちよつと、こつちこいよ。オレ、こつから先にはいけねえから」線路の上。向こう側からタクマが私を呼ぶ。

久しぶりに間近で見た彼は、私よりもこぶし一つ背が低くて、やっぱりあの日と何も変わっていなかった。

「うわ。お前でかくなつたなあ」

笑いながらそんなことをいうから、逆にわたしは悲しくなる。

あれから何年……そう続けようとしたわたしの視界をふつと影が覆った。タクマの顔。

唇のあたりが、すつと冷たくなった。何がしたかったのか、気が付いて、涙がこぼれそうになる。

「わり。やつぱ、無理だったみたいだ。この身体不便だな」キヌもできねえなんて、って寂しそうに笑った。

それから、腕をのばして、わたしにそつと触れようとした。触れられない。通り抜けてしまう。もどかしそうに、齒軋りする。

駄目だ。こらえられない。涙があとからあとから流れ出す。

「やつぱ、ごめん。オレ、悪いことしたかな。もう、おれたち住んでる世界がちがうんだもんね」

くやしそうに呟くタクマの声は震えていて、うつむく瞳から涙がこぼれる。零れ落ちた涙は、アスファルトに滲みも作らずに消えて

いく。

タクマには、影すらなかった。

「そんなわけないよ。うれしいよ」

涙のせいで、声が震えて上手くいえなかった。

線路の上、二人でしゃがみこんで、わたしは声を震わせて泣いた。タクマも、困ったように笑いながら、やっぱり、泣いていた。

風が吹いてきた。沸きあがった雲が、遠くで雷鳴をとどろかせる。さわさわと稲が揺れて、夏のおいを感じた。真夏の真ん中。焦げるほどの陽射しの下で独りとひとり。

「オレ、もう行かなくちゃ。電車がくる」

かすれた声で、タクマがささやく。

行かないでよ。そうすがり付きそうになるのをぐっところえた。

だって、そんな事いったら、タクマが悲しむ。どうしようも、ないんだから。

だから、顔を上げた。せめて別れのとときくらい。何か言いたかったけど、口を開いたらまた泣いてしまいそう。唇をかみ締めながら、精一杯、笑うんだ。

精一杯の泣き笑いは、やっぱりぐちゃぐちゃで、涙がまたあふれてきてそれでも、笑ったよ。ずっと、ずっと大好きだよって笑ったよ。

涙でゆがんだ景色の中、タクマが一步後ろに下がる。

「次に会うときは、サチがしわしわのおばあちゃんになってから、だな」

一步下がることに、姿が薄れていく。行かないでよ、喉まで出掛かった言葉をぐっところえて、前を向いて。

「ありがとう」

なんども言った。最後のほうは、涙と嗚咽交じりで、声にもなっていないかったけれど、タクマはうなずいて、笑ってくれた。それから、陽炎にまぎれるように、ずっと、いなくなった。

まるで最初からそこには存在しなかったかのように。

甲高い音を立てて、ランプが交互に点滅する。黄色と黒の縞々模様。踏み切りのバーが下がる。

うるさいなあってボーッと見上げて、あわてて、わたしは踏み切りの外にでた。

まだ、死ぬわけにはいかないから。それから、ポケットの中の遺書を破り捨てた。細かく、細かく、小さくなるまで破いて風に飛ばした。

たった三両しかない電車が、ゴトゴトいつて駆け抜けた。

つらいこと、いっぱいあったんだよ。わたし、もうあきらめようとしてたんだ。だけどさ、これからも、もっとつらいことだらけかもしれないけど、だけどさ、約束、だもんね。わたし、タクマのぶ

んも笑うんだ。

笑って、生きるんだ。

それから、空を見上げた。

田んぼの上を風が駆け抜けて、涙を乾かしてくれる。泣きはらした目で真っ白く光る太陽を見つめて、まだ、胸は痛むけど、それでも、生きるために、にいつて笑いかけた。

もうすぐ夏が、終わる。九月になったら学校が始まる。

だけど。わたしは、もう、逃げない。

線路の向こう側。陽炎の隙間で、彼がもう一度、微笑んだような気がした。

おしまい。

(後書き)

日本の夏には、死の影がやさしく寄り添っているような気がして好きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3068h/>

太陽の下で

2010年10月28日07時31分発行